松本市美術館 news［あーとふる］
MATSUMOTO CITY MUSEUM OF ART
2017.04 Vol.52

artful

実業家であり、作家・詩人でもある。

宇佐美圭司《時の橋を渡る No.1》1988年 セゾン現代美術館蔵

セゾングループ（西武流通グループ）の西友から、プライベートブランド「無印良品」が出たのは1980年のこと。小学生だった私が初めて買った無印の商品は14本入りの色鉛筆。色鉛筆といえば、普通は軸を芯と同じ色に塗り分けたものばかりで、軸が木地のままの無印の色鉛筆はとても格好良く思えたのです。

他には無いカッコよさ――セゾングループが1970年代から80年代、他社を凌駕したのはまさにそのスタイルでした。田中一光や浅葉克己のアートディレクション、糸井重里のキャッチコピー「おいしい生活。」、そして国内外の「今の」芸術活動を紹介する西武美術館やパルコ劇場。グループを率いた堤清二氏の「見せたいから見せる」という姿勢で展開した事業には、前衛芸術やカウンターカルチャーが溢れ、多くの若者が刺激を受けました。一企業の名前を冠した「セゾン文化」という言葉が生れたことも、そのムーブメントが大きかったことをうかがわせます。

この展覧会では、セゾン現代美術館のコレクションを軸に、その堤氏の交友関係やセゾン文化をご紹介します。

そして、もうひとつ。松本市美術館の顧問だった堤清二氏は、辻井喬のペンネームで「松本が松本のスタイルです」展など10本の展覧会に詩を書き下ろしました。作品リストや図版、作家の関連資料に目を通すだけで、それぞれの展覧会の企図を見抜いた堤氏は、珠玉の言葉で詩をつづりました。創作の世界へと誘（いざな）う10本の詩を改めてご紹介します。

武藤 美紀（当館学芸員）

パウル・クレー《Büst》1922年
セゾン現代美術館蔵

横尾忠則《戦士の夢》1986年 セゾン現代美術館蔵

松本市市制施行110周年記念・松本市美術館開館15周年記念展

堤清二

セゾン文化、という革命をおこした男。

パウル・クレーからジャスパー・ジョーンズ、辰野登恵子まで　セゾン現代美術館所蔵品を中心に

/art Exhibition Guide

2017年4月21日［金］～6月11日［日］

休 館 日／月曜日 ※ただし、5月1日・29日は臨時開館
開館時間／9:00～17:00（入場は16:30まで）
観 覧 料／大人1,000円、大学高校生・70歳以上の松本市民600円
※20名以上の団体は各100円引き。
中学生以下無料、障害者手帳携帯者とその介助者1名無料

優待日のお知らせ
開 館 記 念 日／4月21日［金］　**展覧会観覧料が半額となります。**
市制施行記念日／5月1日［月］　※他の割引との併用はできません。
【リピート割引】大人600円、大学高校生・70歳以上の松本市民300円 ※2回目以降の観覧料

第17回

ポルカドット号探検記

辻井喬と辰野登恵子の合作

辻井喬は2006年、全52回のエッセイを信濃毎日新聞に連載したが、毎回ドローイングを紙面に寄せたのが岡谷生まれの辰野登恵子（1950～2014年）だった。二人の自由な会話のようなやりとりを読者は楽しんだことだろう。今回の展覧会に出品される原作品を見せていただくため、主のいない東京の画室を訪ねた。辰野の仕事場はご遺族により生前のまま大切に残されている。画架には最期まで描き続けた大作が置かれ、紙パレットに絞り出されたターコイズブルーが画家の遺志のように見えた。辺りの床の絵具の痕跡は散った花びらのようで胸が突かれた。

辰野の大型作品は1980年頃に始まるが、それが一つの事件であったのは、その頃、画家たちの間で絵筆を揮（ふる）うことを禁忌のように考える傾向があったからだ。絵画を根底から新しくやり直すことで行詰りを真っ先に切り開いたのが辰野だった。彼女のカンヴァスへの復帰は、その後の美術界に一つのムーヴメントを引き起こした。生前に国立美術館で二度の回顧展が開かれたことも彼女が特別であったことを示すが、亡くなった後も辰野作品への関心は増すばかりだ。

具体的な事柄や物を主題とするのでない辰野作品は、いくつかのシンプルな形象がその都度変形されてシリーズをなす。激しい色彩や形のコントラストにおいても、感情が内にこもることなく、クールで常に鑑賞者に向け開かれているのがとても新鮮に感じられた。

この作品は大量に刷られ読者に届けられる印刷物のための原画だが、辰野のドローイングは必ずしも大作のための準備でなく、70年代、ミニマルな版画を通して始まる彼女の仕事の源流のようなものだ。繰返しの変奏として作品を創り続けた辰野にとって、こうした連載の仕事はむしろ相応しかったのかもしれない。つまり辻井喬の言葉とは別の言葉によるエッセイでもあったのだ。

松本市美術館館長 小川 稔

辰野登恵子《F.T-52-2006》2006年 個人蔵

24 Relay Essay リレーエッセイ

作家・詩人 辻井喬の視点

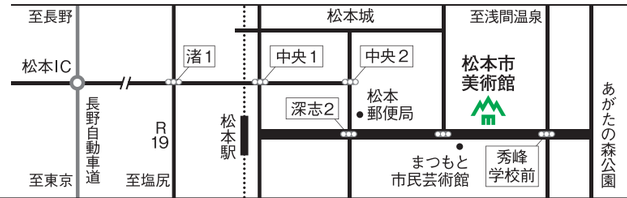
開館から15年を迎える今年、「堤 清二　セゾン文化、という革命をおこした男。」を開催する。堤清二氏は、開館時から顧問として松本市美術館を力強く牽引してくれた。また、私は同氏の作家・詩人の側面である「辻井喬」氏には本当にお世話になった。といっても、直接的に何か指導を受けたわけではない。

開館時から、特に松本ならではの展覧会に「松本が松本のスタイルです」という冠をつけてきた。これは、米倉守初代館長の発案によるものだ。そして、その展覧会には、堤清二（辻井喬）顧問が、詩を寄せてくれていた。それは、開館記念展「山笑ふ」（2002年）から「三代澤本寿展」（2010年）までの10展覧会にわたる。振り返ると、自分は、そのうち8展覧会に主担当または副担当として関わってきた。「松本ならでは」というのは、裏を返せば、これまでに他館が取り上げてきていない作家、分野ともいえる。どの展覧会も手探りの状態だった。一から積み上げていく仕事に、時折襲い掛かる不安。この方向で間違っていないだろうか、もっと魅力的な切り口があるのではないか―。

展覧会開幕まで、あとひと月。準備作業が佳境に入り、身も心も疲弊しきった頃に、辻井氏の詩が手元に届く。いつも決まって手書きの原稿用紙だった。その詩は、思い悩んでいた現状をさらりと肯定してくれる優しさに溢れ、さらには未だに気付けていなかった展覧会の核心をそっと教えてくれるようでもあった。

辻井喬氏が健在であったなら、今回の展覧会にどのような解釈をしてくれたであろうか。氏が示してくれた、冷静かつ軽やかな視点を忘れてはならない。

澁田見 彰（当館学芸員）



松本市美術館 news あーとふる
編集・発行
松本市美術館
MATSUMOTO CITY MUSEUM OF ART
〒390-0811 長野県松本市中央4-2-22 tel 0263-39-7400 fax 0263-39-3400
http://matsumoto-artmuse.jp
リサイクル適性Ⓐ この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

Workshop
ワークショップ

工芸の五月

●はぐくむ工芸 子ども椅子展　5月2日（火）～7日（日）10:00～17:00

●みずみずしい日常2017
「旅行社みずのさんぽ＆井戸端プリント」
4月29日（土・祝）～5月28日（日）
9:00～17:00
※月・水・木曜閉室。ただし、5月1・3・4日はオープン

関連企画や詳しい情報は、
美術館HPをご覧ください。

今年も『工芸の五月』がはじまります

松本の町が工芸に染まる1カ月。美術館では、特別展のほか「みずみずしい日常」、「はぐくむ工芸 子ども椅子展」を開催します。

「みずみずしい日常」は、日々の暮らしを〝ちょっと〟豊かに楽しむための企画をご用意しています。〈湧水〉、〈工芸・クラフト〉、〈町の歴史〉を材料に町巡りを楽しむツアー。町巡りをはじめ日常で感じたことや発見、思い出を自由に形にすることができるワークショップスペース。ふらりと立ち寄って楽しむことができます。

「はぐくむ工芸 子ども椅子展」では、地元の木工作家が子どもたちのために制作した椅子が勢揃い！多様な形の椅子一脚一脚は、優しさと温もりに溢れます。見て、触って、座って、椅子を楽しむ子どもたち。子どもたちにとっての心地好い感覚とはどのようなものなのでしょうか。ご一緒に味わってみてください。

堀井 真美（当館学芸員）

身近なアート

ロゴマーク

松本市美術館
MATSUMOTO CITY MUSEUM OF ART

至るところで見られるロゴマーク。文字で表わすロゴタイプや、シンボルマークを組み合わせて図案化したもので、企業やブランドのイメージを印象づける。シンプルかつ小さいながら、そのデザインが果たす役割は非常に大きい。

松本市美術館にもロゴマークが存在する。デザインは田中一光（1930～2002年）。このデザインについて以下のように残している。

日本を代表する山岳都市松本市に新しく出来たこの美術館は美しく雄大な北アルプスの山々（Mountains）を背景にしています。また深い緑に包まれた自然との調和を考え合わせた市民に開かれた美術館（Museum）です。
大きな屋根のようなM（Mountain）と、しっかりと伝統に根ざしたM（Museum）の二つのMをモチーフに力強くシンボリックにデザインしました。

Mは松本市の頭文字でもある。山々に囲まれ、緑豊かな松本市にある美術館を的確に表現したデザインだ。

「このロゴマークには、どんな意味を込めているのだろう？」「自分のロゴマークを作るとしたら、どんな感じになるかな？」などと考えてみるのも楽しいかもしれない。

稲村 純子（当館学芸員）

今後の展覧会 ラインナップ

松本市市制施行110周年記念・松本市美術館開館15周年記念

日本のアニメーション美術の創造者

山本二三（にぞう）展

～天空の城ラピュタ、火垂るの墓、もののけ姫、時をかける少女～

会場：企画展示室　会期：2017年 7月15日（土）～9月18日（月・祝）

天空の城ラピュタ《荒廃したラピュタ》 ©1986 Studio Ghibli

アニメーションの美術監督・背景画家として、数々の名作を生み出してきた山本二三の40年にわたる仕事をご紹介する展覧会です。

山本二三は、1953年、長崎県・五島列島に生まれます。建築と絵画を学んだのち、アニメーションの背景画の仕事を手掛けるようになり、24歳という若さで、宮崎駿監督のテレビアニメ「未来少年コナン」の美術監督に抜擢され、その後は「天空の城ラピュタ」、「火垂るの墓」、「もののけ姫」、「時をかける少女」などの美術監督も務めました。

入念な取材、綿密なスケッチ、豊かな色彩感覚、そして繊細な表現からつくり出される背景画は、個々のアニメーション世界を形成するだけでなく、見るものを魅了してやみません。

本展では、アニメーション用の背景画を中心に、その前段のスケッチ、イメージボードなど、初期から新作まで約220点をご紹介します。今展のために書き下ろした最新作も登場します！ 日本のアニメーション美術の巨匠・山本二三の世界をご堪能ください。

中澤 聡（当館学芸員）

松本市市制施行110周年記念・松本市美術館開館15周年記念

細川宗英（むねひで）展

会場：企画展示室　会期：2017年 10月7日（土）～11月26日（日）

細川宗英《王妃像No.1》1984年
松本市美術館蔵

細川宗英《追われる餓鬼》1978年
諏訪市美術館蔵

当館が収蔵する主要作家のひとり、彫刻家・細川宗英（1930～1994年）の特別展を開催します。

細川宗英は松本市に生まれ、諏訪市で育ちました。東京藝術大学美術学部彫刻科専攻科在学中から新制作協会展に出品し、その才能は早くから評価注目されます。日本的なものへ回帰するイメージから生まれた「装飾古墳」シリーズ、人間の内面を赤裸々にえぐり出す「男と女」「王と王妃」のシリーズ、鎌倉室町の頂相彫刻から想を得た「道元」、平安末期から鎌倉初期の絵巻「地獄草子」「餓鬼草子」による物語絵画を彫刻化したシリーズほかを発表。風化しゆく人やモノの姿などをとおし、時間や歴史を超越して存在するもの、内部に向かって削ぎ落としていくような造形を追求しました。

本展は、細川彫刻の全貌を紹介するとともに、作品に込められた思いを辿ります。厳として立体が放つ力や美しさ、空間との響き合いを感じていただきたい展覧会です。

大島 武（当館学芸員）

新収蔵作品おひろめ展

会場：常設展示室B
会期：2017年 4月6日（木）～7月23日（日）

西郷孤月《富士》明治30年代後半

2016年度に新たに収蔵した4作家の作品を、これまでの所蔵品とともにご紹介いたします。開館15年を迎え、ますます充実する松本市美術館のコレクションをお楽しみください。

人物往来

2017年3月末日をもって、美術担当（学芸員）の細萱禮子が退職し、企画運営担当の竹内靖長が文化財課へ異動となりました。また、松本市芸術文化振興財団職員の鈴木一代、岡本喜美枝、島山夏味が退職しました。かわって4月から、障害福祉課から臼井ひろみが企画運営担当に、博物館から麻生沙絵が美術担当（学芸員）に着任しました。また、松本市芸術文化振興財団職員に松本和子、髙木弥生、滝澤春江が着任しました。今後とも松本市美術館をよろしくお願いいたします。